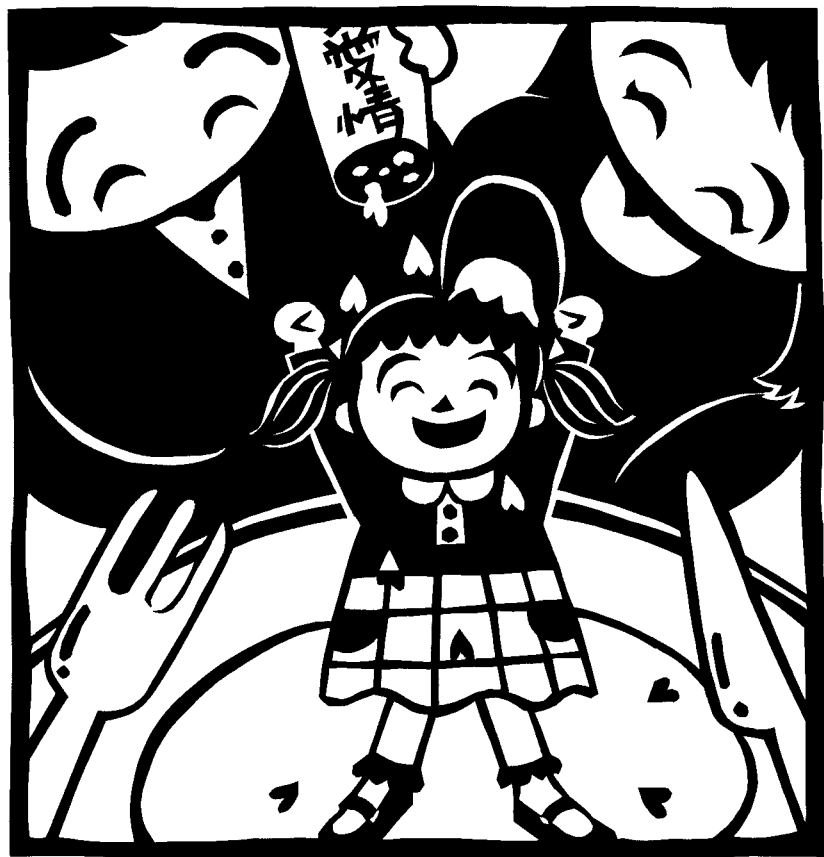


子どもの持ち味を認める



子どもの幸せを祈るのは、すべての親の願いです。また、子どもの将来に期待し、その行く末を案じるのも親の自然な感情でしょう。

しかし、親は時に子どもを思うがあまり、他人と比較して、心ない言葉をかけ

たり、冷たい態度を取ってしまうことがあります。それらの言葉や態度は子どもの心に大きな傷を残すことがあります。

今回の『ニューモラル』では、子どもの成長を見守る大人の心がまえを考えます。

子どもの成長と幸せを祈る

「七五三」

日本各地では、古くから、子どもの成長を祝い、幸せを祈る伝統的な祭や風俗・慣習などが数多く残っています。

その中でも、「七五三」は、日本人であれば誰もが知っている風習です。男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳の年

の主に十一月十五日に、子どものこれまでの成長を祝い、さらなる今後の成長と幸せを祈念して神社・氏神などに詣でる年中行事です。

乳幼児の死亡率が高かった昔は、七歳までの子どもは神の子とされ、七歳になつ



て初めて社会の一員として認められた
うです。七五三の行事は三歳の男女とも
に「髪置き——髪を伸ばし始める」、五歳



男子「袴着——はじめて袴をつける」、七
歳女子「帯解き——帯を使い始める」の
お祝いで、もともとは宮中や公家の行事
でしたが、一般的に広く行われるようにな
り、明治時代になって現代の七五三と
して定着しました。

また、旧暦の十一月は収穫を終えて、
その実りを神に感謝する月であり、その
月の満月の日である十五日に、氏神へ収
穫の感謝を兼ねて子どもたちの成長を感謝し、
加護を祈るようになったそうです。

こうした七五三以外にも、三月の「桃
の節句」、五月の「端午の節句」など、子
どもの成長を祝う節句は、私たちの生活
の中にも溶け込んでいます。わが子の成
長と幸せを祈る親や大人の思いは、いつ
の時代でも変わりがないようです。

自己評価を下げる 子どもたち

ところで、こうした風俗や慣習があるにもかかわらず、現代の子どもたちは、その幸福がはかられているのでしょうか。そのように自問してみると、とても十全とは言えないような気がします。

新聞やテレビを見ると、毎日のように子どもが被害に遭っている報道がなされています。親による虐待、異常者による暴行や殺人等々、子どもたちの幸福に危険信号がともっていると言ったほうがいいような悲しい出来事が続出しています。

身近なところでは、学校の中や友だちの間で行われるいじめや差別が見過ごせません。子どもものときにいじめや差別で受ける心の傷は、その子の自信や自尊心を奪い、その後の人生を狂わせてしまうかもしれないのです。

いじめや差別の怖いところは、被害を



受けた子が自己評価を極端に下げてしま
うことにあります。子どもは自信を失い、
自分の尊厳すら見失ってしまいうこともあ
ります。相手に抗議するどころか、深い
無力感にとらわれて自分だけを責め、自己



嫌悪に陥って人に相談する意欲さえなく
してしまう例も多いといえます。そして、
不登校や引きこもり、ひいては自殺に至
る子まで続出してしまうのです。

一方には、反社会的になって非行に走
る子もいます。『子どもの心』(二木克明
著、一万年堂出版)という本の中で、精神科
医の明橋大二氏は、子どもが非行に走る
原因もまた、自己評価の低さにあると
言っています。

——子どもが非行に走る心の動機は、
二つあります。怒りと、自己評価の低さ
です。

そして、その二つを、とても効果的(?)
に、子どもに植えつける方法があります。
それが、子どもを比較(ひかく)するこ

と、差別、えこひいきすることです。

大人は、よく、

「○○ちゃんはいいい子なのに」

「どうして○○君は、あんなにやっつけてるのに、あんたはできないの」

と言います。大人がこのように言うのは、だから、あなたも、○○ちゃんのように、



いい子になってほしい、頑張がんばってほしい、ということです。

しかし、子どもは普通、そうは聞きません。

「じゃあ、いい子が欲しいなら、○○ちゃんだけを子どもにすればよかったじゃないか。オレなんかどうせいらんだろう」

と聞くのです。——（同書）

子どもはこうして捨すてばちになり、非行に走っていくといっています。

自己評価の低さは、現代つ子けんちよに顕著けんちやくに認められます。これは、定職に就つこうとしないフリーターや、働くことすらもしないニートと呼ばれる若者たちにも共通しているのではないでしょうか。

すばらしい点を認めてあげる

そもそも、私たちはどうして人を比較してしまおうのでしょうか。一人ひとりの顔が違うように、人間は一人ひとり性格も違うし、得意なことも苦手なことも違うし、好きなことも嫌いなことも違うはずです。比較するということは、そのように一人ひとり違う人間を、運動神経とか、偏差値とか、体の特徴とかという一

点だけに絞り込み、比べて上下をつける(評価する)ということでしょう。

社会生活において、そのような評価が必要になる場合もあると思います。しかし、私たちは、それがわずかな一側面に過ぎないことを知るべきです。走るのが

遅くても、すてきな絵を描く子もいますし、算数の成績が悪くても、人を感動させる詩を書く子だっているのです。



私たちは、子どもたちに対して、「かけっこは遅かったけど、こんなにすてきな絵が描けるじゃないか」「算数の成績は悪



かったけど、こんなにすばらしい詩が書けるじゃないか」と認めてあげることが大切なのだと思います。どんな子にもすばらしい点はあるものです。それを認めてあげるのが、子どもへのいちばんのプレゼントではないでしょうか。

先ほどの明橋大二氏は、続けてこう述べています。

——いい子であれば、好かれるし、悪い子であれば、嫌われる。それが世の中です。しかし、少なくとも親や自分の大切な人からは、できが良くても悪くても、変わらず愛してほしいと子どもは思っています。それでこそ、初めて、子どもは、「こんな自分でも生きていいんだ」と思うのです。

——（前掲書）

認められることで人生が変わる

岐阜県に住む南修治みなおしゆぢさんは、ミュージ

シャンであり、子育て支援・環境保護コンサートなど、年間百か所以上のコンサートと百五十回以上の講演をこなしている方です。南さんも、若いときは比較されることで強い劣等感れつとうかんを抱き、非行に走ったといいます。

四人きょうだいの次男として育った南さんは、体も弱く、優秀な一歳違いの兄と弟に、勉強をはじめ何をやっても勝てなかったそうです。親の目は自分以外のきょうだいにしか向いていないように思え、「自分は親にとって必要のない人間、愛されていない人間だ」という強い劣等

感を抱き、不満と怒りがたまっていきました。

中学・高校になるとそれが爆発し、家庭内での反抗、不登校となつて現れ、不良仲間とつきあつて酒やタバコ、シンナーにまで手を出し、オートバイを乗り回す毎日で、警察の世話にもなりました。

そして心を病んで引きこもりが始まり、入院して自殺さえも考えましたが、そんな南さんを救ってくれたのが音楽と奥さんでした。自分の気持ちをストリートに表現した歌を聞いて、奥さんは歌と南さんをありのまま受け入れてくれました。「彼女はぼくを必要としてくれ、心の居

場所を作ってくれたのです」と南さんはその心情を静かに語ります。

田舎暮らしで野菜を自給自足している南さんは、自分の作った小松菜にはスーパーのように値段がついていないことに気づき、こう思ったといっています。

「これまで僕は小松菜に値段を付けるようにすべてを価値付け、価値あることをやっていないと愛されないと生きてきたのではないかと。優秀な兄は百点で僕は零点。兄には価値があつて自分には価値がない。そんな価値付けをしてきたために劣等感に苦しんできたのだ」(モラロジー研究所刊『れいろう』平成十六年三月号「この人に聞く」参照)

南さんはこうして自分を変え、不登校の子どもたちや子育てに悩む母親たちの

相談に乗るまでになったのです。認められ、受け入れられることが人間にとつていかに大切かを物語っていると思います。

彼を救った音楽と奥さん



きいちゃん縫った浴衣

石川県の養護学校に、山元加津子先生という方がいらつしやいます。その方が書かれた『たんぽぽの仲間たち』（三五館）という本に、感動させられる話が載っています。そのあらすじだけをご紹介します。しょう。



きいちゃんは小さいとき、高熱のためにアテトーゼという病気にかかりました。自分の思ったところに、なかなか手をもつていくことができないのです。

そのきいちゃんのお姉さんが結婚することになり、大喜びしていたのですが、お母さんからきいちゃんは結婚式に出ないでほしいといわれました。お母さんはきいちゃん思いの人でしたが、お姉さんが肩身の狭い思いをするのではないか、周りの人から、お姉さんの子どもに障害児が生まれると思われるのではないかと心配したのです。お母さんはさんざん悩み苦しんだ末に、思いきつてきいちゃん

にお願いしたのでした。

教室で泣いているきいちゃんに、山元先生は、いっしょに浴衣ゆかたを作ってお姉さんにプレゼントしようともちかけました。そして、お金がないのでさらしの布を買い、染め物そめを習って夕日色に染め、きいちゃんはお姉さんの浴衣を縫い上げました。アテトーゼのきいちゃんが裁縫さいほうをすることは、常識では考えられないくらい難しいことだったので。

浴衣をプレゼントしてから二日後、お姉さんから山元先生に電話があり、きいちゃんと山元先生に結婚式に出てほしいと言われました。

ためらいを吹っ切って二人で出席すると、お色直しいろなおしのときお姉さんはなんと、あのきいちゃんが縫った浴衣を着て式場



に入場したのです。そしてマイクを持ち、「今、高校生で浴衣を縫える人は何人い



るでしょう。私の妹は、手が不自由にも
かかわらず、浴衣を縫いました。妹は私
の誇りです」と言つて二人を紹介したと

います。

山元先生は、お姉さんの気持ちをおし
はかつて、著書にこう書かれています。

——（お姉さんは）たとえ障害があつ
ても、いいえ障害を持つているからこそ
なお、きいちゃんはきいちゃんだとい
うことをご自分や家族やこれから家族にな
る人たちに示したいと考えられたのだと
思います。——

きいちゃんはきいちゃんのままですば
らしいのですね。つらい立場に立つて苦
悩していたお母さんの気持ちも伝わった
のでしょう。きいちゃんはそのあとでお
母さんに、「産んでくれてありがとう。こ
の世に生まれて本当によかった」と言つ
たそうです。

を認め、受容する

一人ひとりの人間は多様であり、さまざまな側面を持っています。誰一人として同じ人間はいません。皆、それぞれ独自の個性や持ち味を持っているのです。それにもかかわらず、一点だけに絞^{しぼ}って人を比較することは差別につながってきます。それは、別の側面を見落として、その一点だけで上下関係をつくってしまうからです。

家庭の中においても、一人の子を其他のきょうだいと比べて叱つたり、小言^{こごみ}を言ったりしがちです。しかし、親のうかつなひと言が、子どもの心に深い傷を与える場合があります。



子どもの心の世界

親は、子どもの自己評価を下げるような言動には気をつけて、つねに子どもの持ち味を認めて、その能力や適性が十分生かされるように心を配ることが大切です。

私たち大人は、一人ひとりの子どもの目線の向こうに見える世界を共に見つけたいものです。そうした子どもたちの豊かな可能性を認め、受容していくことができる温かな思いやりの心を育て、培っていくべきではないでしょうか。大人のような支えがあつてこそ、子どもはその将来に向けて、大きく力強く羽ばたいて、自分の力を伸ばしていくことができます。

